

## 2005 年度に引き続きパイロット授業として国際センターの調査研究予算により実施した教養に関する科目「開発途上国の環境と開発: 事例研究」の意義

「百聞は一見に如かず」の力。開発途上国と先進国との関係についての政策課題を効果的に理解させる上で、教室での授業や書籍による知識に加えて、開発途上国についての学生の具体的な理解が欠かせません。そこで、2005 年度に引き続き、この科目を開講し、2 週間の日程で、主にマダガスカルにおいて農村、政府機関、国際機関、開発と保全のプロジェクト、NGO、国立公園まで幅広く訪問して、実情を見るとともに、関係者の説明を得る授業を行いました。

2 回目になる 2006 年度は、マダガスカル側の関係者の協力が更に安定し、2005 年度と同様に環境事務次官が直接説明して下さるなどの対応に加えて、マダガスカルの NGO「FANAMBY」の事務所の訪問も実現しました。現地の日本関係機関の対応も更に積極的なものになり、日本大使館からの安全対策についての協力や JICA 事務所長自らの説明に加え、1 泊 2 日を要するアロチャ湖での先進的かつ複合的な JICA プロジェクトの見学の手配もして頂け、また、乳井大使は、公邸での夕食会にお招き下さいました。

この種の授業は、それほど多くの学生が参加できる訳ではありません。これは、学生の自己負担額が大きいこと(交通費、宿泊費、食費等を含む一切で約 30 万円)、多くの学生の参加の場合のリスク管理は大学として不可能であることなどによるものです。他方、大学としても、多くの学生の支払った授業料を少数の学生のために投じているという事実もあります。そのため、この授業の成果を他の学生と共有し、また、スタディ・ツアー型授業についての学内における理解を深めるため、学生、教員、事務職員等を対象にした報告会を実施することが重要です。そのような認識の下、2005 年度、2006 年度それぞれの授業の報告会を、学外の方にも開放する形で開催しました。しかしながら、これまでのような、授業期間中の平日に 1 回限りの報告会では、他の授業との重複のために参加できない学生もあります。このような問題に対処し、また、ホームページの作成等、他の方法も組み合わせて、より多くの学生等と経験を共有できるようにする必要があります。

2006 年度も、一般の「教養教育に関する科目」からの経費の配分が無いため、センター教員会議をお願いして、国際センターの任務のうちの「国際連携、国際化教育及び留学生教育に係る調査研究」の一部のパイロット事業として位置づけ、国際センターが経費を支出することを認めて頂きました。しかしながら、国際センターでは 2006 年度以降の実施を認めないとしているため、今度どのように実施するかが重大な課題になっています。

### 現地訪問日程

9 月 8 日(金)	新幹線、京成電鉄を乗り継いで成田空港へ。ユナイテッド航空でバンコクへ。更にマダガスカル航空の夜行便に乗り換え。
9 日(土)	アンタナナリボ着。 町の散策、スーパーマーケットや市場をのぞくことなどで、町に慣れる。
10 日(日)	ツィンバザザ動植物園(アンタナナリボ市内)
11 日(月)	朝一番に、日本大使館に伺い、予定表等を提出するとともに、最新の治安情勢等の話を伺う。その後、タクシーで、マダガスカル自然保護区管理協会(ANGAP)へ。午後、JICA マダガスカル事務所へ。今年も、外川所長自らがパワーポイント等で説明して下さい。その後、更に、マダガスカルの NGO の FANAMBY へ。
12 日(火)	環境・水・森林省へ。今年も事務次官が自らパワーポイントで説明して下さい。 午後、国連広報センター。 夜は、日本大使公邸で、乳井大使主催夕食会。大使からマダガスカルの開発についての御意見等を伺った後、アンタナナリボ大学等で長年日本語を教えている方及び神戸大学で経済学の学位取得された大統領府経済部長との夕食会。
13 日(水)	FANAMBY が実施を担当している GEF/UNDP プロジェクトを見学(自然林保護と隣接地の農民収入増加策)(首都から 90 キロの農村)。今年も、道路終点のアンジュルベの小さな食堂で典型的なマダガスカルの食事(東南アジアと同じに、米飯におかずを乗せて食べる。)をとる。

14 日(木)	JICA の開発調査プロジェクト「アロチャ湖南西部地域流域管理計画及び農村開発計画」(2003-07 年)訪問。途中悪路でパンクする等したため、到着は午後 3 時になる。町の食堂で遅い昼食の後、松本プロジェクト・マネージャーから、プロジェクトの概要の説明を得た上、プロジェクト地等の見渡せる丘で更なる説明。 夕食は、プロジェクト・チームの全メンバー(日本人、マダガスカル人混成)と。たまたま私用でこの郷里に戻ってきたアンタナナリボ大学の Lalaina 教授(前環境事務次官)がホテルに尋ねて来て下さり、学生交流等の希望を表明。
15 日(金)	松本さんの案内で、多数ある活動のうち山火事対策の組織作り、改良かまどの普及事業、養魚の振興策等について説明頂く。途中では、レンガ造り等も見学。 昼食後、アンダシベ・マンタディア国立公園へ。
16 日(土)	動植物保護と入園料収入の半額の地元開発プロジェクトへの還元、外貨獲得等で大きな役割を果たしているアンダシベ・マンタディア国立公園を見学の後、アンタナナリボへ。
17 日(日)	アンタナナリボ付近に派遣されている青年海外協力隊員 2 名と昼食をとりながら懇談。
18 日(月)	アンタナナリボ発、バンコク着
19 日(火)	国連環境計画アジア・太平洋地域事務所、FAO アジア・太平洋地域事務所。 その後、FAO 近くの桟橋から、古くからのバンコクの交通路であるチャオプラヤ川の定期船に乗って新交通システムの終点に行き、そこからその電車でホテルに戻る。 午後 9 時頃(日本時間午後 11 時)、クーデター発生。町には特に異状なく、現地放送局も報道せず。しかし、英国 BBC の衛星テレビが報道したために、その事実を把握。その後、BBC の放送も、23:55(現地時間)に突然終わってしまった。日本時間深夜になっていたため、電話連絡は控え、携帯メールで連絡しようとするが、発信できず、翌朝に更に対応を試みることにする。それに先立ち、学生たちには、クーデターの事実と、親から連絡等のあった場合には無事を伝えるように助言。但し、1991 年のバンコク勤務時の同様のクーデターの経験もあり、しかも、日本からの心配の電話で初めて発生を知った前回と異なり、今回はバンコクで自ら情報が得られたため、大きな不安はなし。
20 日(水)	前日に送付できなかった携帯メールが送信でき、大学に報告が入ることとなる。その中で、タイ国内では情報が得られないため、情報を欲しいとしておいたのに対し、日本の外務省の情報等を得た。午前6時過ぎには、タイ人の友人たちから電話が入り、軍隊が押さえている具体的場所についての情報、それらの場所には近寄らないほうがよいとの助言、緊急の場合の携帯電話の番号等を知らせてくれた。 学生には、携行していた大学の携帯電話から親に電話を入れさせた。 その後、インターネットカフェで、NHKの報道内容、帰国便のユナイテッド航空がその日の朝も通常通りに出発し、翌日も平常通りの運行予定であること等の情報を確認。しかし、官庁は閉鎖、国連ビルも閉鎖となったため、この日のそれらの機関の訪問もできなくなった。
21 日(木)	検問等もなく、円滑にバンコク空港到着。成田空港で荷物を受け取ってホールに出たところで、携帯メールで大学に報告。京成と新幹線を乗り継ぎ、新潟帰着。



横路のバンコクでの乗り換えの際、マダガスカルから東京農工大学への国費留学生(右端)に出会う。



アンタナナリボの市場。食事、川での洗濯、公共交通等、マダガスカルの人々の日常生活に触れることも重要。



アンタナナリボ市内のツィンバザザ動植物園を訪問して、マダガスカルの人々の休日の過ごし方を学ぶとともに、同国の動植物についても学ぶ。





日本大使館を訪問して、安全対策を図る。



特殊法人のマダガスカル自然保護区管理協会を訪問。



JICA マダガスカル事務所では、今年も外川所長が説明下さる。



環境省訪問では、今年も事務次官がパワーポイントで説明して下さい。



乳井大使は、公邸での夕食会に招待して下さい。会食の前に、マダガスカルの開発について、大使から伺う。



アンジョズルベの小さな食堂で、一般的なマダガスカルの食事をする。



アンジョズルベ近くの残存自然林プロジェクトは、地元の人をガイドにするところまでの展開を見せていた。



アンジョズルベのプロジェクトをUNDP 他に代わって行っているFANAMBYの現地事務所。



アロチャ湖流域でのJICA プロジェクト見学に向かう途中でパンクしてしまった車。



アロチャ湖プロジェクトでは、リーダー自ら説明下さる。



アロチャ湖プロジェクトの実施にあたっている日本人・マダガスカル人混成チームの皆さんとの夕食。



アロチャ湖プロジェクトでは、改良かまどの普及など、従来 NGO が行っていたような活動も取り入れている。



アンダシベ・マンタディア国立公園見学。



青年海外協力隊員達と昼食を共にしながら懇談。



バンコクで FAO の樫尾森林官を訪問。



新潟大学の学生向け広報誌 2006 年 12 月号の国際関係の仕事の特集において、この授業が最初に取り上げられるとともに、表紙にも登場。